社会的苦境場面における言語的印象管理方略

——多次元尺度法によるアプローチ——

早稲田大学 古 屋 健・湯 田 彰 夫¹

Verbal strategies for impression management in social predicaments :
A multidimensional approach

Takeshi Furuya and Akio Yuda (*Department of Educational Psychology,
School of Education, Waseda University, Shinjuku-ku, Tokyo 160*)

The objects of the present study are to classify ordinary social predicaments and to examine the relationships between the perceptions of those predicaments and the verbal strategies for impression management. One hundred and twenty male undergraduates were asked to rate 15 social predicaments on 20 9-point scales. The ratings were analysed by SUMSCAL procedure, and based on the extracted dimensions social predicaments were classified by the cluster method. The subjects were also required to describe their verbal responses (e.g. excuses) as offenders in each situation. Correlations between clusters and verbal responses were examined. The results indicated that ; (a) three dimensions were found to underlie perception of social predicaments—controllability, affective responsiveness, and offensiveness ; (b) social predicaments were grouped into five clusters ; (c) the clusters closely correlated with the subjects' verbal responses. These results showed that the impression management strategies selected by the offender in social predicaments were determined by their perceptions of the situations.

Key words : accounts, impression management, self-presentation, multidimensional scaling, social situations, social interactions.

社会的相互作用の過程で、人が維持すべき印象に対して何かしら望ましくない意味合いを持つ事態が発生し、他者によってその人に責任があると判断される可能性のある場面を、Schlenker (1980) は社会的苦境 (social predicament) と呼んでいる。日常的な相互作用場面で社会的苦境が発生する最も典型的な事態は、何らかの理由で人が自ら呈示しようとした印象と相反する意味を内包する行動をとった場合である。そのような行動がなされると、それまでの関係性に基づいた相互作用の流れは妨げられ、維持することが不可能になる。その結果、相互作用参加者は妨害の原因となる行動を起こした侵犯者 (offender) とその行動によって妨害を受けた被害者 (victim) とに分かれて相対することになり、相互作用を続けるためには両者の間に新たな関係を確立し直す必要が生ずる。日常的な社会的苦境では、関係の再確立の契機として、被害者が侵犯者に対してその行動を説明するよう要求したり、あるいは侵犯者の方から被害者に対して自分の行動を説明する機会を与えてくれるよう求めるのが普通である。そのような場面で侵犯者が呈示する行動の公的説明が印象管理の上で重要な働きをしている

ことは、Mills (1940) をはじめとする多くの研究者が指摘するところである (Goffman, 1955 ; Scott & Lyman, 1968 ; Semin & Manstead, 1983 ; Tedeschi & Reiss, 1981)。侵犯者はその際さまざまな方略を用いて自分の維持すべき印象を守り、できるだけ有利な形で関係を再確立しようと試みる。本研究では Tedeschi & Reiss (1981) に従い、これを社会的苦境場面における言語的印象管理方略と呼ぶ。

社会的苦境における言語的印象管理方略の種類については、これまでさまざまな分類が試みられてきた (部分的分類として Scott & Lyman, 1968 ; Sykes & Matza, 1957 ; 包括的分類として Schonbach, 1980 ; Semin & Manstead, 1983 ; Tedeschi & Reiss, 1981)。それらを総括的に検討した Semin & Manstead (1983) によれば、社会的苦境に陥った侵犯者の取る方略は、行動の侵犯度と自分の責任を認めるか否かによって (a) 謝罪 (apology), (b) 言い訳 (excuse), (c) 正当化 (justification) の3つのカテゴリーに大別される。

ところで、社会的苦境に陥った侵犯者が直面する最大の問題は、これらの方略の中から自分に最も有利な結果を導く選択をすることである。日常的な社会的苦境における侵犯者の方略選択や選択された方略の効果について検討したこれまでの研究では、行動の侵犯度 (Felson

¹ 本論文作成に当たり早稲田大学教育学部橋本仁司教授にご指導頂きました。ここに記して厚くお礼申し上げます。

Table 1
刺激場面リスト

記号	略 称	社 会 的 苦 境 場 面
A	交通事故	Aさんはドライブ中、飛び出してきた歩行者をひいてケガをさせました。
B	自転車	Aさんが駐輪場の鍵のかかっていない自転車に乗ろうとした所に、持ち主が現れました。
C	カメラ	Aさんは友人から借りたカメラを壊してしまいました。
D	デート	Aさんはデートの約束をしていて、待ち合わせの時間に遅れてしまいました。
E	婚約破棄	Aさんは結納までかわした相手との婚約を破棄することにしました。
F	電車	Aさんは電車の中で、隣の人の足を踏んでしまいました。
G	宿題	Aさんは締切日を過ぎても宿題のレポートを提出せず、先生から注意されました。
H	家庭教師	Aさんはアルバイトの家庭教師を無断で休んでしまいました。
I	映画	Aさんは友人に勧めて一緒に映画を見に行きましたが、非常につまらない作品でした。
J	名前	Aさんは人と会話中、相手の名前を間違えて呼んでしまいました。
K	宴会	Aさんは宴会の席上、ビールの入ったコップを倒して友人の服を汚してしまいました。
L	会議	Aさんは会議で自分の意見に反対した同僚をなぐってケガを負わせました。
M	レストラン	Aさんはレストランで食事をした後、レジの所でお金が足りないことに気がきました。
N	間違い電話	Aさんは友人に電話をかけようとして、知らない人の家にかかってしまいました。
O	悪口	Aさんが人の悪口を言っていたら、そばで本人に聞かれていました。

& Ribner, 1981; Darby & Schlenker, 1982), その責任が侵犯者に帰属される程度 (Blumstein, 1974; Darby & Schlenker, 1982), 侵犯者と被害者の相対的地位関係 (Blumstein, 1974; Ungar, 1981) 等が重要な要因として取上げられている。しかし、これらの研究では検討された場面、行動、方略が限られていたり恣意的であるために、その知見から多様な社会的苦境での方略選択を総合的に把握することはきわめて困難である。

そこで本研究では、多次元尺度法を用いて侵犯者の社会的苦境認知を規定している次元を抽出し、抽出された次元と言語的印象管理方略の選択傾向との関連を分析した。多次元尺度法は人々が社会的状況を弁別したり評価する際に用いる潜在的な認知次元を抽出する有効な方法として、近年多くの研究に利用されている。それらの研究を概観すると、個人は一定の認知次元に基づいて社会的状況を弁別しており、社会的状況はその認知次元が構成する多次元空間の中に位置づけられているという共通の仮定の下に、さまざまな社会的状況の分析が試みられている (Forgas, 1982; Magnusson, 1971)。たとえば、Forgas (1980) や Forgas, Brown, & Menyhart (1980) はこれを用いて攻撃行動や犯罪といった社会的エピソードを分析し、抽出された認知次元が“ア・ブリオリ”なエピソード分類や出現頻度、被害の大きさといった他の客観的指標とも深い関連があることを明らかにしている。本研究では、この手法を侵犯者の社会的苦境認知に応用し、社会的苦境を弁別するための認知次元を抽出するとともに、その結果に基づいた社会的苦境の分類を試みた。また、被験者には次元抽出のために利用し

た刺激場面において侵犯者の立場からどのような反応をするかを記述するよう求め、認知次元と反応傾向との関連を分析することによって、社会的苦境の認知が侵犯者の方略選択をどのように規定しているかを検討した。

方 法

被験者 一般教養心理学の講義を受講する男子大学生 120 人。

刺激場面 広範囲な社会的苦境を採取するために、まず心理学を専攻する大学院生 8 人を対象に、日常的な大学生活の中で“弁解や釈明をする必要があるか、またはそれを要求される”場面を列挙するよう求めた。その中から、(a) Snyder, Higgins, & Stucky (1983) の挙げる社会的苦境の 3 つの構成要素、すなわち侵犯者の行動、侵犯者にとって望ましくない帰属がなされる可能性、および観察者の存在が明らかであること、(b) 相互に類似しないこと、(c) 短文で記述しても十分了解可能であることを基準に刺激場面を選択した。さらに遭遇の可能性は低くても十分に想像可能と思われる場面を加え、計 15 個の刺激場面を設定した (Table 1)。なお、評定の際の視点を明確にするために場面はすべて A さんの行動を記述するという形式で統一した。

評定尺度 多次元尺度法による分析には各刺激場面相互間の非類似度のデータが必要である。本研究では各刺激場面对して複数の尺度で評定を求め、その評定値から各場面間の非類似度を計算する方法を採用した。そのために、Forgas (1976) の日常的エピソードの分析、Cody & McLaughlin (1980) の依頼場面分析、Forgas

Table 2
評 定 尺 度

番号	9 ポ イ ン ト 尺 度
1	誰もが遭遇する可能性がある-遭遇する可能性は少ない
2	謝れば済む-謝っても済まない
3	どう振舞って良いか分からない-どう振舞ったら良いか知っている
4	自分の面目にかかわる-自分の面目にかかわらない
5	狼狽する-狼狽しない
6	弁解する必要がある-弁解する必要はない
7	羞恥心を感じる-羞恥心を感じない
8	相手の面目にかかわる-相手の面目にかかわらない
9	相手に与えた被害は大きい-相手に与えた被害は小さい
10	自己正当化できる-自己正当化できない
11	相手との将来の関係に係わる-相手との将来の関係に係わらない
12	自分に非がある-自分に非はない
13	罪悪感を感じる-罪悪感を感じない
14	意図的な-意図的でない
15	不注意な-不注意でない
16	敵意のある-敵意のない
17	自分勝手な-自分勝手にない
18	コントロールできる-コントロールできない
19	言い逃れがきく-言い逃れがきかない
20	相手の感情を害する-相手の感情を害することはない

(1980)の犯罪の分析, および Forgas et al. (1980)の攻撃エピソード分析で利用された尺度の中から社会的苦境の評価にも適切と思われるもの(たとえば, 遭遇可能性, 意図性, 正当性等に関するもの)を選び出し, さらに社会的苦境に固有な状況特性の評価・弁別に役立つと思われる尺度(たとえば, 感情的反応, 体面維持への配慮等に関するもの)を加えて, 計 20 対の両極尺度を作成した (Table 2).

手続き 刺激場面と評定尺度は教示と記入例を付けた小冊子にとじられて配布された。刺激場面の提示順序は被験者ごとにランダムとし, 評定尺度についても 2 通りの提示順序が設定された。被験者はページ上段に記された刺激場面について 20 対の評定尺度に 9 ポイントで評定し, さらにページ下段の空欄に, A さんになったつもりで“このような場合に, 実際にどのような弁解や説明をするか”を具体的に記述するよう求められた。

分析方法 以上の手続きによって得られた資料は認知次元の抽出, 及び次元と方略選択との関連を検討することを目的に, 以下の 4 点から分析された。

1. 次元抽出: 2 相 3 元データを扱う多次元尺度法のうち, 重み付きユークリッド距離モデルを用いて, 社会的苦境を弁別する認知次元を抽出した。このモデルは複数の行列間の差異から軸の方向を一意的に決めることが

でき, 通常, 軸の回転なしに次元の解釈を容易に行うことができる (Carroll & Arabie, 1980; Carroll & Chang, 1970; Kruskal & Wish, 1978; 高根, 1980)。計算手続きとしては, de Leeuw & Pružansky (1978)の SUMSCAL を用いた。本研究のように, K 人の被験者が I 個の対象を S 個の尺度上で評定した場合, 入力データとなる対象間の非類似性距離行列は, 各尺度につき 1 つずつ求める場合と各個人につき 1 つずつ求める場合の 2 通りが考えられる。本研究では社会的苦境場面を分類, 記述するための次元の抽出を目的としているので, 各尺度についての 20 個の非類似性距離行列を入力データとした。尺度 s における対象 i と j の間の非類似性距離行列 d_{ijs} の算出方法は式 (1) の通りである。

$$d_{ijs} = \left[\frac{1}{N} \sum_{k=1}^N (x_{iks} - x_{jks})^2 \right]^{1/2} \quad (1)$$

ここで, N は被験者数, x_{iks} は尺度 s 上での被験者 k による対象 i の評定値を示す。この場合, 算出される次元ウェイトは尺度に関係したものであり, ある評定尺度のウェイトが特定の次元で大きいということはその次元がその尺度の属性と関係していることを意味する。

2. 場面分類: 各刺激場面の次元布置に基づき, クラスタ分析によって刺激場面を分類した。

3. 内容分析: 自由記述によって得られた反応を

Table 3
SUMSCAL 分析によって得られた共通刺激空間

刺激場面	第1次元	第2次元	第3次元
A 交通事故	-1.080	-1.213	.512
B 自 転 車	1.855	-1.097	-.204
C カ メ ラ	-.851	-1.183	-.080
D デ ー ト	-.018	.304	-.458
E 婚約破棄	1.206	-.229	1.932
F 電 車	-.983	1.603	-.480
G 宿 題	.992	.150	-1.476
H 家庭教師	1.204	-.518	-.620
I 映 画	-.394	1.523	-.592
J 名 前	-.698	1.173	.195
K 宴 会	-1.092	-.265	-.059
L 会 議	1.219	-.463	1.502
M レストラン	-.682	-1.131	-1.142
N 電 話	-.972	1.610	-.844
O 悪 口	.294	-.264	1.813

Semin & Manstead (1983) のシステムに基づき内容分析し、反応カテゴリー別の出現頻度を得た。

4. 分類と反応との関連：刺激場面のクラスター分類の結果と各反応カテゴリーの反応出現頻度との関連について対数線形モデル（弓野，1981）により分析した。対数線型モデルは χ^2 検定と異なり交互作用の分析が容易にできるという利点がある。

結 果

SUMSCAL の結果 2次元解から6次元解まで求めた場合の分散説明率は、それぞれ、37.1, 44.1, 49.0, 53.5, 57.8 パーセントであり、2次元解から3次元解にかけては7パーセントの増加が見られるのに対し、それ以降は5パーセント未満の増加しか見られない。また、3次元解では全ての次元が10パーセント以上の分散を占めているが、次元数を増やしても、5パーセント程度の分散を占める次元しか組み込まれない。従って、ここでは3次元解が最適であると解釈された。共通刺激空間の構造を Table 3 に、各評定尺度の次元ウェイトを Table 4 に示す。抽出された次元は Table 3 に基づいて解釈された。第1次元では“意図的でない-意図的な”，“不注意な-不注意でない”，“自分勝手な-自分勝手でない”，“コントロールできる-コントロールできない”の4つの評定尺度で次元ウェイトが高く、統制可能性の次元とされた。第2次元は“狼狽する-狼狽しない”，“謝まれば済む-謝っても済まない”，“罪悪感を感じる-罪悪感を感じない”といった感情的動揺を示す評定尺度でウェイトが高く、感情的反応性の次元と解釈された。

Table 4
各尺度の次元ウェイト

尺度番号	第1次元	第2次元	第3次元	R ^{a)}
1	.413	.244	.165	.257
2	.170	.614	.180	.438
3	.316	.279	.418	.352
4	.331	.443	.214	.352
5	.247	.662	.244	.559
6	.285	.407	.243	.306
7	.305	.434	.236	.337
8	.215	.206	.703	.583
9	.190	.407	.494	.446
10	.310	.483	.283	.409
11	.238	.282	.441	.331
12	.275	.477	.305	.396
13	.226	.534	.259	.403
14	.841	.082	.150	.737
15	.658	.279	.208	.554
16	.465	.087	.407	.389
17	.732	.227	.163	.614
18	.562	.294	.330	.511
19	.333	.497	.267	.429
20	.284	.293	.437	.357

分散説明率 .173 .155 .113 .441

a) 各尺度の非類似性距離行列において3つの次元が説明する分散の割合を示す。

第3次元は“相手の面目にかかわる-相手の 面目にかかわらない”，“相手に与えた被害は大きい-相手に与えた被害は小さい”の尺度で高いウェイトを示していることから、侵犯性の次元と命名された。なお、第1次元と第3次元はウェイトが高いほどそれぞれ統制可能で、侵犯の程度が大きいことを、また第2次元はウェイトが低いほど感情的反応が大きいことを意味する。

場面分類 共通空間内での各刺激場面の座標値から刺激場面間のユークリッド平方距離を算出してクラスター分析を行った。最短距離法、最長距離法、群平均法、およびワード法による分析の結果、最短距離法を除く他の3手法に共通の4つないし5つのクラスターが見い出せた。ここでは、相対的に解釈が容易な5つのクラスターを採択した。Fig. 1 から明らかなように、第1クラスター、第2クラスター、第5クラスターは統制可能性次元と感情的反応性次元での布置から弁別される。また、図中では第3クラスターと第4クラスターはきわめて近接しているが、侵犯性次元での布置によって両者は明確に区別される。

内容分析 自由記述の反応はまず Semin & Manstead

Table 5

クラスター別各カテゴリ反応数と対数線形モデルによる分析結果

ク ラ ス タ ー	カ テ ゴ リ ー					計
	謝 罪	補 償	意図の否定	その他の言い訳	正当化	
第1クラスター	121――	136++	249――	173	18――	697++
第2クラスター	22――	6	180++	49――	42++	299――
第3クラスター	58	15++	255++	35――	4――	367――
第4クラスター	50	0――	16――	127++	190++	383――
第5クラスター	213++	13	219	124	19――	588++
計	464++	170――	919++	508++	273――	2 334
++	標準値が正の方向で $p < .01$					
――	標準値が負の方向で $p < .01$					
	+ 標準値が正の方向で $p < .05$					
	- 標準値が負の方向で $p < .05$					

(1983) のカテゴリーシステムの 下位 カテゴリーに基づき 2 人の判定者によって独立に分類された。しかし、カテゴリーが多岐にわたり、判定者間の判定一致率 (78.4%) も低かったため、以下の分析では次のような上位・中位カテゴリーに集計した資料を用いた。このカテゴリーシステムでの判定一致率は 91.5% である。

1. 謝罪：行動の不適切さや自己の責任を認めた上で後悔、自責の念、罪悪感等を表明して他者の許しを乞うものである。Semin & Manstead のシステムには謝罪の下位カテゴリーは設定されていないが、本研究ではこれをさらに自分の非を認めたり許しを乞うだけの“謝罪”と自分が与えた被害や損害の補償・弁償を申し出る“補償”とに分けた。

2. 言い訳：言い訳は自分の行動が不適切なものであ

ることは認めるが、その行動に対する自己の責任を否定しようとするものである。Semin & Manstead はこれに 4 つの中位カテゴリーを設けているが、本研究では事故や予知せざる結果であることを主張する“意図の否定”と他の統制力の欠如、行為の否定、情状の訴えをあわせた“その他の言い訳”の 2 つに分けた。

3. 正当化：正当化とは、行動の責任は認めるが、その行動や結果は不適切で誤ったものではないと主張するものである。Semin & Manstead はこれを 8 つの中位カテゴリーに分類したが、本研究ではこれをまとめてひとつのカテゴリーとして扱った。

なお、ひとりの被験者が 2 つ以上の反応をしたり、いずれにも分類できない反応をしたケースがあるために、総反応数は刺激場面ごとに異なっている。

分類と反応との関連 各反応カテゴリーの出現頻度をクラスター別に集計してクラスター 5 × カテゴリー 5 の 2 要因対数線形モデルにより分析した結果、クラスター要因とカテゴリー要因の主効果と交互作用が有意となった (Table 5)。クラスター要因の主効果は第 1 クラスターと第 5 クラスターで反応数が多いことを意味する。これは、この 2 つのクラスターに含まれた刺激場面数 (4 場面) が他のクラスター (2 または 3 場面) より多かったためである。カテゴリー要因の主効果は補償と正当化の出現頻度が他の反応カテゴリーに比べて少ないことを示している。この結果で最も重要なのは交互作用で、これはクラスターによって頻度の高いあるいは低い反応カテゴリーが異なっていることを意味している。

考 察

SUMSCAL モデルによる多次元尺度解析の結果、統制可能性、感情的反応性、侵犯性の 3 つの認知次元が抽出された。侵犯性次元と統制可能性次元はその内容から判断して、それぞれ従来の研究で取り上げられた行動の

Fig. 1. 統制可能性次元 (X軸) と感情的反応性次元 (Y軸) 上でのクラスターの分布。

侵犯度と帰属される責任度の要因に対応した認知次元であると思われる。他方、感情的反応性次元は状況が喚起する困惑感や罪悪感の強さを示している。前者は人が呈示すべき印象と実際の行動との間にギャップがある時に体験される情動、後者は自己非難に伴う情動であり、Goffman (1971) によれば、その表明は謝罪の本質的な構成要素であると考えられる。

本研究の主たる目的は抽出されたこれらの次元と侵犯者の方略選択との関連を検討することであった。分析の結果は両者の間に密接な関係があることを示している。

以下、結果に基づいて認知次元と各印象管理方略との関係について考察する。まず、統制不可能な行動によって惹起されたと判断された場面（クラスター1とクラスター5）では謝罪または補償が多く選択されている。既に述べたように、この次元は侵犯者に帰属される責任の程度と関連があると考えられることから、負うべき責任が小さい時には、それを自ら認めたり償いを申し出ることによって誠実さや他者への敬意を印象づけるのが最も自分に有利であると判断されたものと推測される。また、謝罪は感情的反応が小さい場面（クラスター1）で多く、補償は感情的反応が大きい場面（クラスター5）で多く選択された。これは、補償の申し出が罪悪感や困惑感の表明手段として利用されたことを示している。

他方、社会的苦境が統制可能な行動によって惹起されたと知覚された場面では、謝罪や補償より言い訳や正当化が多く選択された。その中でも侵犯度が高いと知覚された場面（クラスター4）では正当化が多く、侵犯度が低い場面（クラスター3）では意図の否定による言い訳が多い。侵犯度が低い場合、言い訳によって自分に帰属される責任を低減することで、自分が維持すべき印象を守ることができると侵犯者は判断したのであろう。それに対して侵犯度が高い場合、たとえ言い訳によって責任を回避できたとしても、あるいは謝罪によってある程度まで印象の低下を防ぐことができたとしても、新たに確立される相互作用においては相対的に侵犯者は弱い立場に置かれることが予想される。したがって、このような場面で侵犯者が正当化を選択したことは、責任回避や印象の維持を犠牲にしても、新たな相互作用においてできるだけ有利な立場に立とうとする試みを示していると考えられる。これは、正当化が単に自分の維持すべき印象を守るためだけでなく、社会的苦境を契機として新たな相互作用を確立する目的で積極的に利用される可能性を秘めていることを示唆する。なお、クラスター2では意図の否定による言い訳と正当化が多く選択された。これは、クラスター2の布置が統制可能性次元でクラスター4に類似し、侵犯性の次元ではクラスター3に近いために、その両方の特徴が表われたものであろう。同様に、クラスター3で補償が多かったことは、統制可

能性次元で相対的に低かったことによると考えられる。

以上を要約すると、抽出された認知次元上での社会的苦境の布置は侵犯者による印象管理方略の選択と密接な関連があり、統制可能性次元は謝罪・補償または言い訳・正当化の選択に、感情的反応性次元は謝罪または補償の選択にそして侵犯性の次元は言い訳または正当化の選択に係わっていると言うことができる。なお、本研究では認知空間における社会的苦境の布置と方略選択との関連に焦点を絞って検討し、個人差に係わる要因については一切触れなかったが、侵犯者の自己監視、マキャベリズム、自己意識、承認欲求等の強さによって方略選択の傾向が異なることは十分に予想される (Schlenker, 1980)、この問題に対しても、本研究で利用した多次元尺度法は個人差をも同時に分析対象にできるという利点があり、有効な分析手段となりうる。今後は、本研究の知見を踏まえて、個体要因も含めた分析を行う必要があろう。

引用文献

- Blumstein, P. W. 1974 The honouring of accounts. *American Sociological Review*, 39, 551-566.
- Carroll, J. D., & Ararie, P. 1980 Multidimensional scaling. *Annual Review of Psychology*, 31, 607-649.
- Carroll, J. D., & Chang, J. J. 1970 Analysis of individual differences in multidimensional scaling via an N-way generalization of "Eckart-Young" decomposition. *Psychometrika*, 35, 282-319.
- Cody, M. J., & McLaughlin, M. L. 1980 Perceptions of compliance-gaining situations: A dimensional analysis. *Communication Monographs*, 47, 132-148.
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R. 1982 Children's reactions to apologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 742-753.
- de Leeuw, J., & Pruzansky, S. A. 1978 A new computational method to fit the weighted Euclidean distance model. *Psychometrika*, 43, 479-490.
- Felson, R. B., & Ribner, S. A. 1981 An attributional approach to accounts and sanctions for criminal violence. *Social Psychological Quarterly*, 44, 137-142.
- Forgas, J. P. 1976 The perception of social episodes: Categorical and dimensional representations in two different milieus. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 199-209.
- Forgas, J. P. 1980 Images of crime: A multidimensional analysis of individual differences in crime perception. *International Journal of Psychology*, 15, 287-299.
- Forgas, J. P. 1982 Episode cognition: Internal representation of interaction routines. In L. Ber-

- kowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 15. New York : Academic Press. Pp. 59-101.
- Forgas, J. P., Brown, L. B., & Menyhart, J. 1980 Dimensions of aggression : The perception of aggressive episodes. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **19**, 215-227.
- Goffman, E. 1955 On face-work : An analysis of ritual elements in social interaction. *Psychiatry : Journal for the Study of Interpersonal Processes*, **18**, 13-231.
- Goffman, E. 1971 *Relations in public : Micro-studies of the public order*. Harmondsworth : Penguin.
- Kruskal, J. B., & Wish, M. 1978 *Multidimensional scaling*. Beverly Hills, Calif. : Sage Publications.
- Magnusson, D. 1971 An analysis of situational dimensions. *Perceptual and Motor Skills*, **32**, 851-867.
- Mills, C. R. 1940 Situated actions and vocabularies of motive. *American Sociological Review*, **5**, 904-913.
- Schlenker, B. R. 1980 *Impression management : The self-concept, social identity, and interpersonal relations*. Monterey, Calif. : Books/Cole.
- Schonbach, P. 1980 A category system for account phases. *European Journal of Social Psychology*, **10**, 195-200.
- Scott, M. B., & Lyman, S. M. 1968 Accounts. *American Sociological Review*, **33**, 46-62.
- Semin, G. R., & Manstead, A. S. R. 1983 *The accountability of conduct : A social psychological analysis*. New York : Academic Press.
- Snyder, C. R., Higgins, R. L., & Stucky, R. J. 1983 *Excuses : Masquerades in search of grace*. New York : John-Wiley & Sons.
- Sykes, G. M., & Matza, D. 1957 Techniques of neutralization : A theory of delinquency. *American Sociological Review*, **22**, 664-670.
- 高根芳雄 1980 多次元尺度法 東京大学出版会
- Tedeschi, J. T., & Reiss, M. 1981 Verbal strategies in impression management. In C. Antaki (Ed.), *The psychology of ordinary explanations*. New York : Academic Press. Pp. 271-309.
- Ungar, S. 1981 The effects of status and excuse on interpersonal reactions to deviant behavior. *Social Psychological Quarterly*, **44**, 260-263.
- 弓野憲一 1981 対数-線型モデルによる 質的データの解析とのための BASIC プログラム 静岡大学教育学部研究報告 (自然科学篇), **32**, 189-215.

—1987. 4. 13. 受稿, 1987. 11. 14. 受理—